

# 生きがいを失った祖父母から学んだこと

学校法人 北陸学園 北陸中学校

一年 高澤櫻子

私の祖父は七十九歳まで営業の仕事をしていました。スーツを着て会社に向かう姿は、私にはとても立派に見えて、年をとっても元気な人だと尊敬していました。

祖母も、特別支援学校に通う子どもたちを送迎するバスの介助員の仕事をしていました。子どもと触れ合うことが大好きで、やさしい祖母はその仕事にやりがいを感じていたと思います。二人は「まだまだ若いね」と言われるのがうれしそうでした。母も、「おじいちゃんとおばあちゃんは昔から働き者やで」と話していて誇りに思っていました。

けれども、祖父の足が弱って、おぼつかない足取りで転んでしまうようになったところから、少しずつ変化が出てきました。仕事で頼まれていたことを忘れてしまったり、同じことを何度も繰り返す聞くようになり、ついには会社から「もう働くのは難しい」と言われてしまいました。祖母も祖父を一人にしておけず、職場の人からも頼りにされていた介助員の仕事を辞めることになりました。

それから二人は家にいる時間が増え、笑顔も少なくなりました。祖父が「俺は、もう役に立たん人間っちゅうことやろ」とつぶやいたとき、私は何も言えず、心が重苦しくなりました。祖母が「早く死にたい」と涙を流したときも、私はどう声をかけていいかわかりませんでした。

私は福井に住んでいるので、祖父母とは一緒に暮らしていません。たまに大阪の家を訪れると、そのたびに「前より悪くなっている」と感じます。母が祖父母と電話で話すときも、同じことを何度も聞かれてイライラしている様子が伝わってきます。祖父母もそれを感じて落ち込んだり怒ったりしています。私が小学五年生ぐらいまでは、会うと、「どこへ出かける？何して遊ぼうか？」と嬉しそうに接してくれた祖父母です。その時を思い浮かべると、たった一、二年ですっかり元気をなくした今の祖父母の姿に、私まで気分が落ち込んでしまいます。

祖父母は、自分の意思で時期を決めて仕事を辞めたわけではありません。「まだまだ仕事を頑張りたい」という思いを持ったまま、辞めないといけない状態になったのです。収入のことも不安になったと思いますし、何より「生きがい」や「自分の居場所」を失ったのだと思います。まだできることはあるはずなのに、年をとったから

といってすぐに「もう働けない」と決められてしまうのは、あまりにも悲しいことです。私は、高齢者にとっても働くことや生きがいを持つことは大切な人権なのではないかと感じました。

今の社会には、高齢者が安心して働ける場所や役割が少ないように思います。そのために「自分はいらない」と感じてしまう人もいるのではないのでしょうか。年をとった人が、「支えられるだけの存在」と見られてしまうのは間違っていると思います。

私はこんな未来を思い描きます。たとえば祖父のように足腰が弱って毎日通勤できない人は、オンラインでできる仕事を紹介、サポートしてもらえると「もう一度頑張れる」と思えるのではないのでしょうか。祖母のように子どもと接する事が好きな人なら、地域の子育て支援に関わることもできるかもしれません。高齢者が若い人に経験を伝えたり、逆に若い人からはスマホの使い方を教えてもらったりする交流の場があれば、お互いに役割を發揮できると思います。

私はこれまで、年をとったら仕事を辞めて家でゆっくりするのが幸せだと思っていました。もちろん、働いている時にはできなかつた旅行や趣味を楽しむのも幸せのひとつだと思います。

しかし、今の祖父母の姿を見て、私は「人にとっての幸せは、ひとりひとり違う」と強く感じました。ただ生きていくだけでなく、自分の役割や生きがいを持つことが、人を笑顔にし、生きる力になるのだと思います。私たちにできることは、ひとりひとりの思いを聴いて、寄り添い、それを尊重することではないでしょうか。そこに年齢は関係ありません。

私は将来、どんな人も「自分はここにいていい」と思える社会をつくっていきたいです。そのためには、高齢者と社会がつながり続けることが大切だと考えます。弱った時だけ手助けするのではなく、意欲のある人が仕事の情報を受け取りやすいようにする必要もあると思います。また、学校や地域で世代をこえた交流を進め、子どもや若者が高齢者の知恵に触れる機会を作ること、お互いを尊重し支え合える社会が実現できると考えます。これからますます高齢化社会が進むので、仕事を引退しても活動できる場が今よりもっと増えていくことを期待します。まずは自分の身近な祖父母や地域の高齢者に寄り添い、小さな支えを積み重ねることから始めたいです。